

隅田川

「これは隅田川の渡守にて候

今日舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候

又都より女物狂ひの下り候由

暫く舟を止め彼の物狂ひを待とうずるにて候

〽実にや人の親の

心は闇にあらねども

子を思ふ道に迷ふとは

〽今こそ思ひしら雪の

身に降りかゝる憂き苦勞

誰に語りて晴らすらん

「これは都北白川に

年を経て住める女なり

〽思はざりき思ひ子を

ひと商人に誘はれて

〽行方は何処逢坂の

関の東の国遠き

東とかやに下りぬと

〽聞くより心乱れ髪

櫛けづるらん青柳の

愛しわが子を尋ねわび

千里を行くも親心

来るとはなしに東なる

隅田河原の片ほとり

渡りに近く着きにけり

「のう」舟人

わらはをもその船に乗せて給はり候へ

「おことは何処よりいつかたへ下る人ぞ

「これは都より人を尋ねてこの東へ下る者にて候

なう舟人

あれに白き鳥の見えたるは何と申し候ぞ

「オゝあれこそ沖の鷗なり

〽うたてやな浦にては

千鳥ともいへ鷗ともなどこの隅田川にては

都鳥とは告げずして

〽沖の鷗と夕潮に

〽在五の君の古へはわが身の上に業平や

〽いざ言問はん都鳥

〽我思ひ子はありやなしやと

問へど

〽答へも渚こぐ

〽舟人妾を乗せ給へと

いふに

〽舟人掉取り直し

「急ぎて舟に乗り候へ

「オ、嬉しの舟人やな

あの向ひの柳のもとに人の多く集りしは
何事にて候ぞ

「さん候

あれは大念仏にて候

それにつき哀れなる物語りの候

この舟の向ひへ着き候はん程に

語つて聞かせ申すべし

さても

〽去年の弥生に

人商人の都より

幼き者を買ひとりて

奥へ下らん道すがら

〽ならばぬ旅の疲れにや

〽一足だにも歩めじと

この川岸にひれ伏せしを

情を知らぬ人買ひは

幼き者を路次に捨て

そのまゝ奥へ下りたり

「その幼な子を見てあるに

由ある者と思ふにぞ

〽人々さま、いたはりて

国を問へば

〽都の白川

〽父御の名をば問ひたるに

〽吉田と許りゆう告ぐる

〽諸行無常の鐘の音を

〽聞くが此世の名残りにて

草葉の露と消えにしは

〽哀れといふも愚なり

今日乗合ひの方々も逆縁ながら一遍の

念仏申させ給へかし

「して舟人

今の物語りはいつの事にて候ぞ

「昨年三月しかも今日の事にて候

「シテその稚子の歳は

「十二歳とか

「その名は

「梅若丸

〽その幼き者こそは

この物狂ひが子にてあれ

これは夢かや

浅ましやと人目も恥ず泣き伏せば

「オ、

さては御身が子にてありしか

あら悼はしや

せめては亡き人の墓なりとも見せ申さん

いざ此方へ

〽いざさせ給へと伴へば

〽昨日迄も今日迄も

逢ふを頼みに見も知らぬ

〽東の果へ下りしに

〽今は此世になき跡に

一ト本柳枝たれて千草百草茂るのみ

せめては土を掘返へし

亡骸なりとも今一度

見たや

逢ひたやと許りに

落つる涙は道芝の

露を欺く

ばかりなり

「如何に御歎き候共

今はその甲斐候はね

只々後世を弔ひ候へや

〽我子の為と身を起し

〽月の夜念仏諸共に

〽南無阿弥陀仏

〽阿弥陀仏

隅田河原の波風も

〽声たて添へて

〽南無阿弥陀仏

〽阿弥陀仏

「のう〜今の念仏の内に正しく我子の声すなり

〽我子はどこにいつくにぞと

あるかなきかと算木のいとゞ心の物狂ひ

我子の声と聞きたるは

〽塚に添ふたるさし柳

〽すいと埒を立つ白鷺の残す雫か

露か涙か

〽幻の

見えつ隠れつする程に

〽空ほの〜と明けにけり。